

ぶらりわが街宮沢界限

⑰ 道の昔と今 ― 奥多摩街道

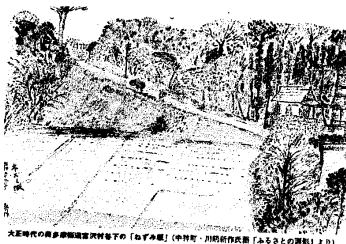
奥多摩街道(都道29号線)は江戸時代からある道路として、昭島市域の南側を段丘に沿って東西にはしり、東は立川の柴崎村から郷地・福島・築地(ついで)・中神・宮沢・大神・田中・拝島へと旧村の中心集落沿いを結び、西は福生の熊川村へ通じ、現在も主要道路です。

奥多摩街道は、市域ではもっとも古く五日市道(いつかちみち)ともいわれ、昔は道幅約2間(3.5m位)しかない狭い道路で、宮沢界限では、多少道筋が変わっています。

- ・「水見坂」―別称「ねずみ坂」とも呼ばれ、宮沢から大神に抜ける急坂で現在の八高線の東側で、坂から多摩川の河原が望められていました。
 - ・「中神坂の石垣」―立川方面から西に進み、和田橋交差点を過ぎ宮沢方面への急坂は、誰でも気が付くのが両側のそびえ立つ石垣です。特に中神駅からまっすぐ約1Km(中神停車場通り(都道152号線))と奥多摩街道交差する「中神坂交差点」付近が、特に高く築かれています。多摩川の玉石を使った石垣は、東京府が昭和6年(1931)奥多摩街道の旧道の蛇行と急坂を直す改良工事の際に、地元土建業者(郷地・拝島)が請負して造成されたもので、東京では最大規模。その人工美は多摩屈指といわれ、貴重な文化遺産です。なお、中神坂交差点際にある「日枝(ひえ)神社」南で、旧奥多摩街道沿いの石垣はもっと古く、関東大震災(大正12年(1923))にもびくともしなかったそうです。
 - ・「洗坂」―段丘が発達する中神の地形は、南北の道路にとっては自然的に坂道を必要とする。特に多摩川の沖積面から青柳段丘崖の登りは、平均10m位あり、急坂が長坂で、その典型が中神自治会館東の「洗坂」であり、この坂を通る通が旧奥多摩街道です。
 - ・「一番屋敷」―立川方面から西に進み和田橋交差点を100mほどのところに、左に入る道があります。かつては、旧奥多摩街道で中神村の本通りでした。その道沿いに「一番屋敷」と呼ばれる家があります。一番とは？ 明治4年(1871)明治政府は屋敷番号制を施行し、村々の家ごとに番号を付けました。中神村では、村の東の入口でもあり、一番東側の家(現在、中神町2-1-2の石田耕一さん宅)から順に一番屋敷、二番屋敷といった番号が付けられました。明治6年(1873)の番戸帳(書の戸籍)によると、中神村には百四番までの屋敷と、神社・寺院があり、560人が住んでいたと記されています。この屋敷番号は、明治14年(1881)地番制に変わると廃止されました。
 - ・昭和42年(1967)8月16日、奥多摩街道成隣小学校前に市内初の横断歩道橋完成
 - ・昭和58年(1983)2月19日、奥多摩バイパス(新奥多摩街道(都道211号線))宮沢～堂方間開通。堂方上交差点で国道16号線(東京環状)に接続しました。
- * 奥多摩バイパスが開通する以前は、奥多摩街道と諏訪松中通りは、諏訪神社前で三叉路でしたが、現在も残る交差点の南西方向の狭い道が、多摩川堤防へ抜けていました。

記

防犯宮沢支部会計 西山 禎一



大正時代の奥多摩街道成隣小学校下の「一番屋敷」(中神町、川崎新成隣「あそびの園」より)

